

がん教育推進自治体視察レポート

教師（学校）と経験者と医療者で行ういのちの授業

1. 概要

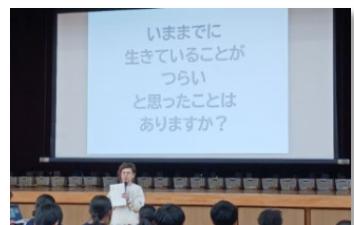
場所	岐阜県輪之内町立輪之内中学校 体育館
日時	令和7年11月5日（水）14:20～15:10 <6時間目>
対象学年・人数	中学2年生 93名
教科・単元名	総合的な学習の時間
授業者	西川 慎也 教諭
外部講師	大垣在宅クリニック 医師 進藤 丈 氏 一般社団法人LINKOS 共同代表 彦田 かな子 氏
選定理由	教諭、医師、がん患者それぞれの特性を生かし、複数事例を組み合わせた構成が、他の自治体の参考となるため、選定した。

2. 授業内容

＜授業のねらい＞

医師やがん経験者の話を聞くことを通して、健康や命の大切さについて、主体的に考えることができるようとする。

＜授業の流れ＞

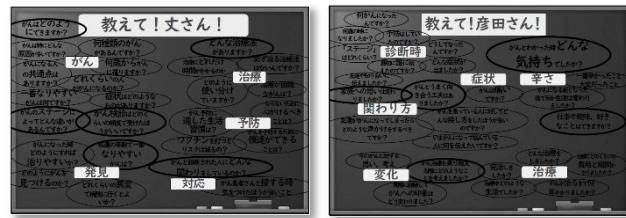
導入（約5分）	<p>西川教諭による導入・講師の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業のミッション（ねらい）の確認 ・事前に生徒から収集した「講師に聞きたいこと」の紹介 ・講師の紹介 	
外部講師講話（約40分）	<p>外部講師： ・大垣在宅クリニック 医師 進藤 丈 氏 ・一般社団法人LINKOS 共同代表 彦田 かな子 氏</p> <p>授業進行： 西川 慎也 教諭</p> <p>演題「がんへの理解を深め、支え合って生きていくために」</p> <p>●内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西川教諭による既習内容振り返り（がんの基礎知識） ・進藤医師自己紹介、講話 ・彦田氏自己紹介、講話 ・生徒同士の意見交流 	 
閉会（約5分）	代表生徒による感想の発表	

※授業後に関係者で振り返り会実施

＜外部講師活用講演の詳細＞

① 事前授業（担任指導）

- ・がんが発生する仕組等について
- ・「外部講師に質問したいこと」を考える。（スライド教材化し、講話の導入に活用）



※授業前は「がん教育評価アンケート」を活用し、アンケートを実施した。

② 本時・外部講師講話

・西川教諭による導入（授業のミッション（ねらい）の確認、既習内容の振り返り）

- ・がんに関わる知識を深め、がん経験者からの話を聞いて、自身や家族の命について考える。
- ・外部講師に向けて生徒が事前に考えた質問を、「気持ち」や「治療」などにカテゴライズしたスライドを提示した後、講師の紹介をした。

・進藤医師自己紹介

大垣市民病院にて定年まで勤務。大垣市民病院では、緩和ケアセンターや通院治療センターで、がん患者の痛みや心の辛さに関わる仕事を行ってきた。



・彦田氏自己紹介

自身のがん罹患の経験やその時に感じたことを伝えることを通じて、これから希望をもって生きたいと思うきっかけとしたい。



・西川教諭による既習内容振り返り「がんの基礎知識」

- ・がんについての復習（2人に1人が罹患し他人事ではない病気、発生する仕組、早期発見と検診の重要性 等）



・進藤医師による講話「がんの予防、がん検診について」

- ・中学生でもできる生活習慣の整え方
 - ・ウイルスや細菌の感染で罹患する可能性をもつがんもあるが、がん自体は感染しないので、がん患者との握手やハイタッチなどの接触をしても病気がうつることはない。
 - ・日本では5つの種類のがんに対して、対策型がん検診が行われており公的補助が受けられる。子宮頸がんは20歳以上からのがん検診の受診が勧められている。
 - ・受診率が「50%に届いていないと思う」に挙手をした生徒が大半→検診を受けることは大切
- また、がん検診の有効性がみられないがんについては、自分の身体からの危険信号、メッセージに耳を澄ませることが大切となる。がんのみでなく、自分の健康に気をつけることが必要。

・彦田氏による講話「告知された時の気持ち、治療について」

告知された時、信じたくないという気持ちだった。治療については薬物療法を選択し、副作用も辛かったが、家族に伝えた時、不安だったのは自分だけではないと分かった。

・進藤医師による講話「がんになった際の症状・治療法について」

- ・症状は多様で、「この症状があれば、がん」と言えるものはない。
- ・治療法は手術、放射線、薬物療法の主に3つ。病状に応じて治療法を選択、組み合わせる。
- ・標準治療とは部位やステージに応じた過去のデータが揃っているということである。
- ・がんの「ステージ」という言葉は患者に宣告をするためではなく治療法を決めるためのものである。
- ・高額療養費制度等により治療費に対する心配を最小限にして安心して治療が受けられる。
- ・患者、家族、医療関係者でお互いに相談をしながら治療方針を決める共同意思決定という考え方方が大切。
- ・緩和ケアについては、がん患者だけでなく家族も支援の対象になり、医師・看護師・薬剤師だけでなく、様々な職種が連携、少しの治療に伴う辛さが軽減するように支援している。
- ・専門機関等の正しい情報の入手や、また同じ病気の患者同士で情報交換を行うことができる患者サロンという機能を活用することが重要である。



・進藤医師からのメッセージ

「がんばれ！」と言われて「こんなにがんばっているのに…」と思う人と、「ありがとう」と思う人がいるように、言葉は人によって受け取り方が異なる。本人が何を求めているのか想像し、確認し、サポートしてあげることが大切である。



・彦田氏による講話「支えになったこと、仲間からのメッセージ」

- ・支えになったものは家族。家族が今までと何も変わらない生活をしてくれていたことがとても嬉しかった。
がんになって、当たり前の日常の大切さに気付いた。
- ・知人に、自らを「ガンカンジャー」と名乗り、がん患者が笑顔で過ごせる「ガンカンジャー行動指針」を会う人たちに伝えている患者さんがいた。がん患者だからできる体験を楽しもう、今生きていることを楽しもう、助けてほしいことは口に出して伝えよう等、それがキラキラ生きられる秘訣。主語を中学生に置き換えると誰にでも当てはまる行動指針である。
彼女は、5年前に大腸がんで亡くなったが、命はつながっていくのだと改めて思える。

・彦田氏からのメッセージ

事前質問で、「病気を経験して生きる意義や生活の変化について聞きたい」というのがあった。生活は変わらないが、生きる意味が自分で明確になった。
生まれてから今までの人生を1つの線で考えてみた。生まれてから今まで、振り返ってみると、過去の辛いと思っていた点は遠く、見えなくなっている。私たちは経験を積み重ねて今を生きているが、振り返ることで見え方が変わってくる。今日感じたことをみんなの大切な人に伝えてほしい。どんな気持ちになったか？思つたこと、感じたことは大切にしてほしい。助け

てほしいことがあれば、口に出して周りに伝えてほしい。

・周囲の生徒同士で意見交換

「感じたことは口に出して周りの人と話し合う」「がん予防には日頃からの生活が大切」等、それぞれが思うことを言葉にして思いを共有していた。



・生徒の感想発表(代表者 1名)

治療は手術だけだと思っていたが、2年間の点滴、5年間の薬の服用をしていたことを知り、年月がかかることや大変さを知った。今、普通の日常を送っていることは当たり前ではないということを感じた。

また、一生のうち2人に1人が、がんになる可能性があり、他人事ではないと思った。今のうちから生活習慣を考え、家族や周りの人にも教えてあげることが大切だと感じた。

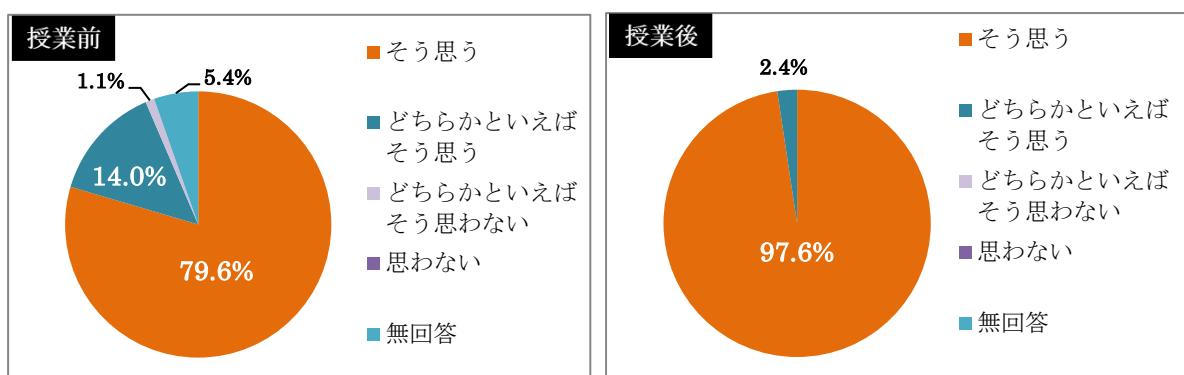


③ 事後学習（担任指導）

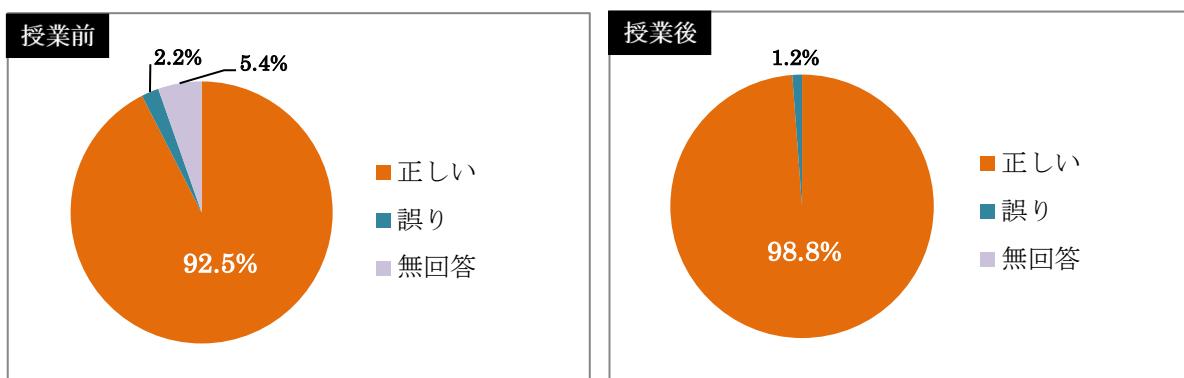
文部科学省より依頼の「がん教育評価アンケート」を活用し、授業後の振り返りとして意識アンケートを実施した。授業前にも同じ項目でアンケートを実施していることから、意識変容を確認するまでのデータ収集も兼ねた。

(がん教育評価アンケート結果)

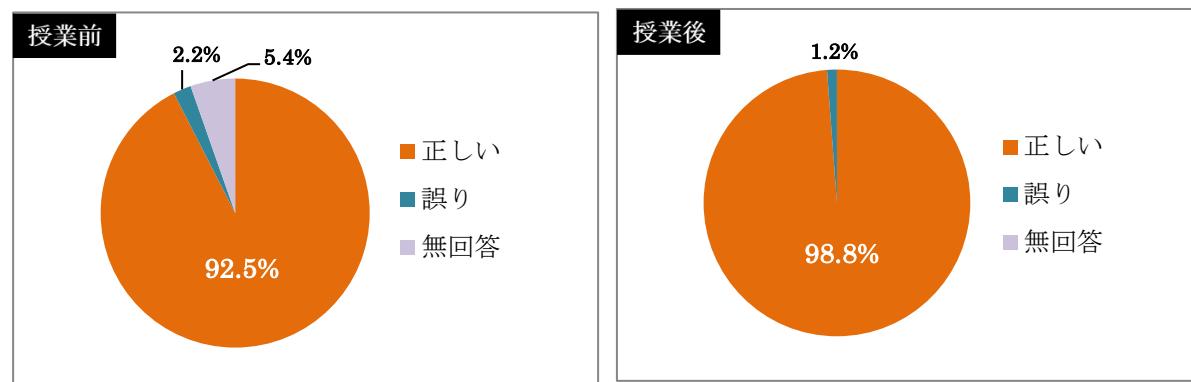
「がんの学習は、健康な生活を送るために重要だ」



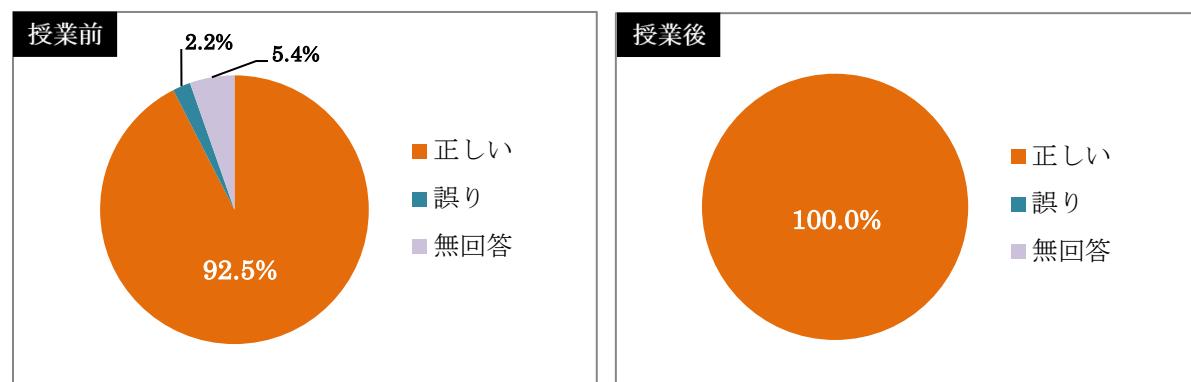
「がんは誰もがかかる可能性のある病気である」



「たばこを吸わないこと、バランスよく食事をすること、適度な運動をすることなどによって、予防できるがんもある」



「早期発見すれば、がんは治りやすい」



3. 生徒の様子

＜学習への意欲や発言の様子（発言内容）等＞

要所で講師から生徒に質問を投げかけ、一方的に話すだけではないコミュニケーションが生まれていた。メモを取りながらも真剣に講師の話に耳を傾け、何度も頷く様子が見受けられた。また、相槌を打ちながら真剣に聞き入る生徒の姿が多く見受けられたが、講師がそれぞれの立場での知識、経験、思いを伝えることにより、生徒の共感を伴った理解につなげられていたのではないかと感じた。講話の冒頭で彦田氏より自身のがんの病名は何か、と生徒への問い合わせがあったが、指名を受けた生徒は発言に詰まることなく、それぞれが知っている病名を挙げており、中にはスキルス胃がん等、難しい病名の発言があった。

医師、がん経験者が交互に講話をを行う構成であったが、生徒の集中は途切れることはなかった。教諭が全体進行を務めたことや講師同士のバトンタッチの際の軽妙なやりとりにより、ストーリーが分断されない工夫をしていることが伺えた。

＜その他＞

がんの基礎知識は教諭、医療的知識は医師、経験に基づく話はがん患者が担ったことで、各講師の専門性に特化した効果的な授業が実現していた。

4. 授業を行うまでの外部講師とのマッチングや調整の流れ

・外部講師を派遣するまでの流れ（協議会の開催、名簿や派遣窓口の活用、等）

県教委より、2月末に学校募集を開始。3月頃よりリストをもとに、県の医師会に講師の選定を依頼した。

・外部講師との事前調整の方法、回数、要した時間 等

10月 初回打合せを実施

11月 2回目の打合せを実施(講師↔教員の講話の流れ、繋ぎなど細かな調整を行う。)

5. 振り返り会内容

- ・今後、小学校で実施するなど町をあげてやれるとよい。
- ・講師に対する事前質問の内容が良かった。がんの基礎知識に関する事を事前授業で行うと、そうした質問ばかりになりがちだが、医師に聞きたいこと、がん患者に聞きたいことと、立場に合った質問の内容だった。
- ・生徒が相槌を打ちながら真剣に聞いていた。
- ・講師と先生との連携がよかったです。時折生徒に質問を投げかける形なのも良かった。
- ・話の内容によって講師が変わる構成であったが自然な流れでバトンタッチを行っており、ストーリー性があった。